

論文要旨

論文 題目：「悠久の歴史を持つ単一民族国家」批判

ー『三国遺事』檀君による一つの民族の擬制ー

内容

韓国において、檀君を民族の祖として、一つの民族の歴史が語られ続けてきた。その結果、歴史教科書『高等学校 国史』にみられるように、「悠久の歴史を持つ単一民族国家」と自国の歴史を規定し、これが現在の国民の歴史観として定着している。この根拠の核心が『三国遺事』檀君神話である。

しかし、『三国遺事』テキストに則して読んでいけば、高句麗百済新羅の三国の始祖伝説はそれぞれ独立した神話として成立しており、さらに重要なのは、檀君と三国の始祖が系譜として繋がっていない。つまり、『三国遺事』からは一つの民族の答えは得られない。だからといって、これから「『三国遺事』檀君による一つの民族」は擬制でしかなく、それを根拠とする「悠久の歴史をもつ単一民族国家」は正されるべきでものある、というだけでは済まされない。問題は、「一つの民族の歴史」が『三国遺事』からどのように作り出されてきたかである。これをはっきりさせることが、「悠久の歴史をもつ単一民族国家」批判でなければならない。ここから、本論文は始まった。

現存する最古の檀君文献は、13世紀に書かれた一然(1206~1289)の『三国遺事』(1283)である。「檀君」は『三国遺事』以前の書から確認できなく、『三国遺事』によって檀君は作られたといえる。では何故、『三国遺事』は檀君を作り出したのか。これは、国家存亡の危機に面して、自己を確証するためであったろう。しかし、ここで、国家存亡の危機を民族主義によって克服し、檀君を民族の祖とする一つの民族の認識が生れた、と端的に主張したきたところに問題があったといえる。国家存亡の危機を克服するのは、民族主義しかなかったのであろうか。ここから、『三国遺事』檀君をも一度読み直す必要があった。

『三国遺事』の古朝鮮条は「桓雄降臨」神話から始まるが、この内容をテキストに則して読んでいけば、人間界を含む六欲天の第一人者帝釈天桓因の命によって子桓雄天王が直接降りてきて、人間世界を仏教でもって教化する、となる。そして、この仏教でもって教化された世界の中において、帝釈天桓因の孫として檀君は生まれ古朝鮮を建国するのである。さらに、『三国遺事』は前後所將舍利条において「東震(東国)と西乾(印度)は共に一つの天なり」と、韓国(中国)印度三国が同じ世界にあると語っている。則ち、古朝鮮が「桓雄降臨」により開かれた「仏教によって教化された世界」の中に建国され、かつ始祖檀君が帝釈天の孫であることを最初に確認したことで、天竺中国に対し自分たちの立場を主張し、自己確証を行うのである。『三国遺事』檀君は、民族主義でなく、仏教の普遍的世界の中にある。

では何故「一つの民族」として読まれてきたのか、その答えは中世における「古代」の構築ということにある。ここで、檀君は記されていないが、現存する最古の書『三国史記』に注目した。『三国史記』は、中国に対し独自の三国の始祖伝説を載せることによって、三国を朝鮮半島の歴史として編纂した。ここに、高句麗を含めた歴史共同体とし

ての三国認識がはじめて示されたと言える。次に、『三国遺事』は、朝鮮半島の最初の国として、箕子朝鮮より早い檀君朝鮮の存在を記し、朝鮮半島が「中国の勢力箕子によって開かれ教化された」という中国正史が語る韓国古代史の前提を否定した。さらに、同じ時期に檀君を記した『帝王韻紀』は、檀君を朝鮮半島の開祖として記した。これらの三書は、それぞれ別個の古代をそこに描き、時代と共に朝鮮半島という歴史共同体意識を作り上げて来たと言える。即ち、この中世の書が作り出した「古代」が、一つの民族の下地になる「朝鮮半島の開祖檀君」を生み出したのである。

さらに、朝鮮時代に入り、中世の書によって作られた「檀君」は歴史化され、朝鮮半島の開国の祖として定立していった。まず、朝鮮王朝は独自に始まった国家であるとする認識が生れた。ここで、檀君は、開国の祖らしく天から直接降りてきた神人と認識され、檀君の子孫が具体的に語られていく。また、檀君の治績を多様に提示することによって、韓国の文化の根源をも檀君に求めた。この時点で、『三国遺事』とは別個の檀君が語られていることを認識しなければならない。

朝鮮時代末期を迎え、開化と同時に日本からの圧迫に対抗するように民族主義的歴史学が台頭した。教科書を中心とした当時の歴史叙述は、愛国主義民族主義独立主義の意識が強く反映され、そこに檀君を韓国史始初に登場させ、建国と民族の始祖として叙述した。ここに、民族意識を高揚すると同時に、朝鮮が檀君以来中国の属国でない自主国家として、悠久の歴史と伝統を持つという韓国史像が構築されたのである。

これに対し日本政府は植民化政策の一貫として、韓民族の独立の象徴であった「檀君」の抹殺を図った。このような日本政府の方針は、元の侵略期、壬辰倭亂(文祿の役)と丙子胡亂(清の侵略)期と、同じような状況を作り出したといえる。つまり、檀君意識

は独立運動と絡みさらに強く現れ、一つの民族の根拠として民族の祖檀君が登場したのである。

この時期、檀君の根拠として日本人の学者が否定した『三国遺事』が韓国において再登場し、『三国遺事』をもとに檀君の史実化への研究が民族史学者を中心としてなされた。彼らは武力行動は起こさなかったが、檀君神話研究を通して民族運動を展開した者たちと言える。当時の民族史学者たちは檀君神話を守り発展させることによって、民族の自尊心を回復させ自主独立の正統性をそこに見つけようとした。即ち、檀君を単に古朝鮮の祖として終わらせず、全韓民族の祖として独立の象徴として昇華させた。檀君は独立運動と共にイデオロギー化したのである。そして、この植民地に時代に作られたイデオロギーが、独立後も「檀君」を規制したのである。

日本からの解放そして大韓民國樹立とともに、「檀君」を自主独立民族性の回復の象徴、民族の精神的支柱として考える風潮がますます高まり、檀君は偉大な民族の祖として、その教え理念が現在に至る、と認識された。このように、檀君は再創造され、今なお『三国遺事』檀君を根拠として「悠久の歴史を持つ単一民族国家」が語られているのである。

確かに、檀君を最初に作り出したのは『三国遺事』である。しかし、それは『三国遺事』だけによるものではない。『帝王韻紀』の朝鮮半島の祖とする檀君を『三国遺事』の檀君に補完することによってなされた。これは、元々一つの檀君神話があったと考えることによって成り立つ。つまり、『三国遺事』檀君も『帝王韻紀』檀君も同じ檀君という認識から、檀君はの朝鮮半島の開祖となり、三国の祖となる。その結果、三国は一つの民族と捉えられるのである。さらに、『三国史記』との「三国」を重ね、『三国史記』以前から三国を一つの民族とする古代がつけられたといえるのである。『帝王韻

紀』と『三国遺事』の檀君は別個のものであるにもかかわらず、それを一つにして、「檀君」と「古代」の構築は果たされたのである。

さらに、韓国の歴史教科書は、近現代に作られた民族の祖としての檀君、人間社会の王としての桓雄、広大な古朝鮮の領域などの朝鮮時代の認識を全て『三国遺事』によるものとして、「悠久の歴史をもつ単一民族国家」という現在の国民国家観を完成させるという間違いを犯している。こうした、問い直さなければならない国民国家観が、現在の教育現場にあるという問題を指摘しなければなるまい。

『三国遺事』は、こと中世にだけ終わるのではなく、後世そして現在もその意味は更新され引き継がれてきた。元に侵略され国家の存亡の危機に自分達の存在を保障するものとして、壬辰倭亂(文禄の役)と丙子胡乱(清の侵略)期において国を守る精神的礎として、日本植民地時代に独立運動の心の支えとして『三国遺事』檀君があった。そして、現在の南北統一の根拠として『三国遺事』檀君がある。檀君はイデオロギーとして存在し続けてきた。現在の『高等学校を国史』の「悠久の歴史を持つ単一民族国家」もまた、『三国遺事』の再創造に他ならない。

「『三国遺事』檀君による一つの民族」は擬制でしかなく、それを根拠とする「悠久の歴史をもつ単一民族国家」は正されるべきでもある。